

ポスター展形式による社会的マイノリティの排除と包摂の表現
ファンタジーとメディアの分析を通じて

人間空間コース 1911072 宮腰悠生

2022年12月13日 提出

要旨

筆者は小説『ハリー・ポッター』の魅力は、被差別の主体を架空の存在を置き換えて、社会的マイノリティの排除と包摂を表現していることだと考えた。読者は、当事者ではないからこそ、差別や偏見といった現象について分かりやすく考えることができると考えた。

主体を架空の存在に置き換える、『ハリー・ポッター』の小説上の手法を、別のメディアに応用して作品を制作したいと考えた。

制作の初めに、『ハリー・ポッター』における被差別の主体を架空の存在に置き換える描写について分析することにした。分析の対象は、作中社会における社会的マイノリティである、マグルと人狼にした。その結果、マグル（非魔法使い、非魔法使いの家系出身の魔法使い）は、人種差別や階級闘争の表象であり、伝統的な家系出身の魔法使いから、誹謗中傷やテロなどの差別行為の対象になっていることが分かった。また、人狼は、病気や障害のメタファーで、社会的障壁によって不利益を描写されていた。このように『ハリー・ポッター』では、現実社会における社会的マイノリティの不利益とリンクした、リアルな社会的マイノリティの排除を描いている。

次に、『ハリー・ポッター』の表現手法の分析を踏まえた上で、その手法をどのメディアに応用するかを検討した。その結果、『ハリー・ポッター』におけるグラフィックデザインの効果と、ポスターの社会性を反映するメディアとしての特性を踏まえて、制作のメインをポスターにすることにした。しかし、ポスターのみの展示では、社会的マイノリティを表現するには限界があるため、複数のポスター、キャプション、補足資料から構成されるポスター展を制作することで、表現の制限の問題を解消することにした。

さらに、ポスター展の形式で社会的マイノリティを表現するにあたり、社会的マイノリティとメディアについての分析を行った。社会的マイノリティへの差別的表現には、ヘイトスピーチやステレオタイプなどがあり、これらは社会的に弱い立場にある人を攻撃するだけでなく、人々に差別意識を植え付けるという問題点がある。

これまでの分析を踏まえ、架空の社会的マイノリティとして人狼を選び、架空の未来の日本における排除や包摂を、ポスターを通じて描写することで、現実社会の日本の社会的マイノリティに関する問題提起を行うことにした。作品のメインであるポ

スターは、現実の社会的マイノリティの排除と包摂に関する事例を参照して制作した。さらに、そのポスターを架空の制作年順に沿って展示し、ポスター解説のキャプションや、架空の新聞の切り抜きを加えて、ポスター展の形式にした。

本制作は「鑑賞者が現代社会の社会的マイノリティに関する問題について考えられる作品」になることと、「制作の題材として、多くの人が存在を認知している一方で、実際には存在しないため、現代人に直接的な利害関係の無いファンタジーの架空的な存在を用いることで、現代社会を表現する手法の可能性を検討」することを目指した。

第1章はじめに

- 1.1 背景
- 1.2 目的
- 1.3 本論文の構成と制作手法

第2章 『ハリー・ポッター』シリーズにおける社会的マイノリティ

- 2.1 『ハリー・ポッター』シリーズについて
- 2.2 社会的マイノリティとは
 - 2.2.1 スティグマとは
- 2.3 『ハリー・ポッター』における社会的マイノリティ
 - 2.3.1 『ハリー・ポッター』における社会的マイノリティとしてのマグルの表現
 - 2.3.1.1 『ハリーポッターと秘密の部屋』におけるマグルの排除
 - 2.3.1.2 『ハリーポッターと死の秘宝』におけるマグルの排除
 - 2.3.2 『ハリー・ポッター』における社会的マイノリティとしての人狼の表現
 - 2.3.2.1 人狼が直面する社会的障壁の表現
 - 2.3.2.2 制度の障壁
 - 2.3.2.3 観念の障壁
- 2.4 『ハリー・ポッター』における社会的マイノリティの表現の分析の結果
- 2.5 制作にあたっての『ハリー・ポッター』の問題点
- 2.6 『ハリー・ポッター』シリーズにおける社会的マイノリティのまとめ

第3章 メディアとしてのポスターとポスター展について

- 3.1 本制作のメディアの形式としてのポスターの検討
 - 3.1.2 『ハリー・ポッター』におけるグラフィックデザインの効果
 - 3.1.3 社会を反映するポスターの性質
 - 3.1.4 ポスターのメディア分析のまとめ
 - 3.1.5 ポスターのみの制作の限界
- 3.2 本制作のメディアの形式としてのポスター展の検討
 - 3.2.1 複数のポスターによる社会の文脈の提示

- 3.2.2 作品を解説するキャプション
- 3.2.3 資料による補足
- 3.3 メディアとしてのポスターとポスター展についてのまとめ

第4章 日本の社会的マイノリティとメディア

- 4.1 メディアにおける社会的マイノリティに対するヘイトスピーチ
- 4.2 ステレオタイプ
- 4.3 日本の社会的マイノリティとメディアの関係のまとめ

第5章 本制作における「架空の社会的マイノリティとしての人狼」と「架空の社会としての2030-2040年代の日本」の設定

- 5.1 架空の社会的マイノリティとして人狼を選定した理由
- 5.2 人狼が登場する架空の社会として2030-2040年代の日本を設定した理由
- 5.3 本制作における「2030年代以降の日本」の設定の解説
- 5.4 本制作における「架空の社会的マイノリティとしての人狼」と「架空の社会としての2030年代以降の日本」のまとめ

第6章 架空の社会的マイノリティとしての人狼を表現したポスターについての解説

- 6.1 2030年代初期のポスター
 - 6.1.1 マイノリティと病気の結びつけ
 - 6.1.2 科学的根拠の無い情報発信
- 6.2 2030年代中期のポスターの解説
 - 6.2.1 「ワーウルフ ID マーク認知のお願い」のポスターの解説
 - 6.2.2 人狼を誹謗中傷する保守系雑誌の広告ポスターの解説
 - 6.2.3 人狼に対する差別的な活動を行う団体が発行するポスターの解説
- 6.3 2030年代の後期のポスターの解説

- 6.3.1 人狼をテーマにした洋画のポスターと、その映画を恋愛映画として宣伝する日本版のポスターの解説
- 6.3.2 人狼の身体的特徴に関する偏見をメイクとして商品化した雑誌のポスターの解説
- 6.3.3 人狼は暴力的という偏見によって制作された暴漢注意のポスターの解説
- 6.4 2040年代のポスターの解説
 - 6.4.1 チョコレートの無いバレンタインイベントのポスターの解説
 - 6.4.2 人狼の政党の選挙ポスターの解説
 - 6.4.3 人狼を讃えるパレードのポスターの解説
 - 6.4.4 2040年代のポスターに登場するマークについての解説

第7章 架空のポスター展「Moonlit Posters」についての解説

- 7.1 架空のポスター展「Moonlit Posters-人狼の排除と包摂にまつわるポスター展-」の設定
 - 7.1.1 小型ギャラリースペースの設営
- 7.2 複数のポスターや資料を時系列順に並べる展示方法
- 7.3 キャプションによる作品解説
- 7.4 補足資料の架空の新聞記事
 - 7.5 新聞記事内におけるポスター以外のメディアにおける人狼の扱われ方への言及

第8章 制作の振り返りと結論

- 8.1 「鑑賞者が現代社会の社会的マイノリティに関する問題について考えられる作品の制作」についての試行と振り返り
- 8.2 「制作の題材として、多くの人が存在を認知している一方で、実際には存在しないため、現代人に直接的な利害関係の無いファンタジーの架空的な存在を用いることで、現代社会を表現する手法の可能性を検討」についての試行と振り返り
- 8.3 卒業研究公開審査会を通じた振り返り
 - 8.3.1 ポスターとキャプション、新聞の展示のみでは、鑑賞者が人狼に対する差別の文脈を十分に理解することができない可能性がある点と、考えられる改善案

8.3.2 差別や偏見という問題を描く期間が10年という年数が十分でない可能性がある点と、考えられる改善案

8.4 振り返りのまとめ

第9章 おわりに

9.1 あとがき

9.2 謝辞

第1章はじめに

1.1 背景

私はJ.K. ローリングの世界的なベストセラーである『ハリー・ポッター』を讀んでいて、本作の魅力は、社会的マイノリティの排除と包摂に関する描写であると感じた。

作中の社会には様々な社会的マイノリティが登場し、彼らは差別と偏見の対象になることもあれば、それに抗って社会を変えようとすることもある。作中における社会的マイノリティは、非魔法使いの家系出身の魔法使い、魔法使いの家系出身の非魔法使い、人狼、巨人、屋敷しもべ妖精などがいる。彼らは、現実社会には存在しない架空の存在である。一方で、ハリー・ポッター作中の社会的マイノリティが受ける差別や持たれる偏見の内容は、現実社会の社会的マイノリティに対する差別や偏見とリンクしたものになっている。

ハリー・ポッター作中の社会的マイノリティは、架空の存在であるため、現実の人間には利害関係がない。非魔法使いを暴力や蔑称を付けるなどで差別する魔法使いの蛮行を描写したとしても、直接的に誰かを乏しめたり、批判するものではない。差別する側を差別される側を架空の存在に置き換えることで、『ハリー・ポッター』の読者は差別や偏見の問題について分かりやすく捉えられるようになっているのではないかと筆者は考えた。

この被差別の主体を架空の存在に置き換える手法は『ハリー・ポッター』という小説や、それを原作とした映画で用いられているが、私はそれをデザイン的手法として用いて作品を制作したいと考えた。

1.2 目的

本研究制作の目標は2つある。1つ目は、鑑賞者が現代社会の社会的マイノリティに関する問題について考えられる作品の制作である。2つ目は、制作の題材として、多くの人が存在を認知している一方で、実際には存在しないため、現代人に直接的な利害関係の無いファンタジーの架空的な存在を用いることで、現代社会を表現する手法の可能性を検討することである。

1.3 本論文の構成と制作手法

本制作では『ハリー・ポッター』の「差別の被写体を架空の存在に置き換える」手法を応用したデザイン作品として、架空のポスター展を制作することにした。本論文はその制作アイデアと、制作プロセスについて論じるものである。第1章では、『ハリー・ポッター』における「被差別の主体を架空の存在に置き換える」表現手法について紹介し、それを日本の社会的マイノリティを表現するデザイン作品の制作に応用するという、本制作の背景と目的について説明した。

第2章では、本制作で採用する「被差別の主体を架空の存在に置き換える」表現手法について、『ハリー・ポッター』シリーズを参照し、架空の社会的マイノリティの表現についての分析について記述する。分析の内容は、『ハリー・ポッター』に登場する、マグルと人狼という架空の社会的マイノリティに着目し、作中における具体的な差別の描写についての考察である。

第3章では、第2章の分析に基づいた作品を制作するにあたって、作品の形式として適切なメディアについての検討の内容について記述する。ポスターに着目し、「ハリー・ポッターにおけるグラフィックデザインの効果」、「ポスターの社会を反映する特性」の観点から、本制作のメディアとしての、ポスターの可能性と限界について論じる。さらに、ポスターの限界を解消するために、ポスター展の形式に発展させた理由についても述べる。

第4章では、ポスター展の形式で社会的マイノリティを表現するにあたり、現実社会のメディアと社会的マイノリティでの扱われ方について論じる。「ヘイトスピーチ」や「ステレオタイプ」を例に挙げて、メディアにおける社会的マイノリティの差別の問題点について明らかにする。

第5章では、本制作における「被差別の主体」として人狼を選定し、架空の2030-2040年代の日本を表現することにした理由と、設定の詳細について述べる。まず、既存のフィクションにおける人狼の特徴を分析し、本制作に適切な人狼像を創作する。また、人狼によって架空の未来の日本を表現しようと試みた理由を挙げ、その詳細を解説する。

第6章では、社会的マイノリティとしての人狼を用いて表現したポスターについての解説を行う。現実社会におけるどのような問題を参照し、被差別の主体を架空に置き換えることによって、どのような制作を行ったのかについて述べる。

第7章は、第6章のポスターをどのようにしてポスター展の形にまとめたかについて解説する。ポスターだけでは、表現できないものを「時系列による展示」、「キャプションの制作」、「補足資料としての新聞記事」でどのように補ったのかについて述べる。

第8章では、本制作の結論と、展開の可能性について論じる。

第9章では、まとめと後書きについて述べる。

第2章 『ハリー・ポッター』シリーズにおける社会的マイノリティ

筆者が第1章で、ハリー・ポッターの魅力が、被差別の主体を架空の存在に置き換える手法で、社会的マイノリティの排除と包摂を表現していることであり、その手法を応用したデザイン作品に応用したいという考えを述べた。そのため、ハリー・ポッターにおける社会マイノリティの描写について詳しく分析することにした。ハリー・ポッターに登場する「マグル」と「人狼」という存在に分析の対象を定め、架空の社会における差別の表現についての考察を行う。

2.1 『ハリー・ポッター』シリーズについて

J.K. ローリングの『ハリー・ポッター』は『賢者の石』『秘密の部屋』『アズカバンの囚人』『炎のゴブレット』『不死鳥の騎士団』『半純血のプリンス』『死の秘宝』の7作から構成されるイギリスの小説シリーズである。本作は世界的なベストセラーで、世界中にファンを持つ作品であり、映画化もされている。

本作はイギリスを舞台に、自身の出自について何も知らずに叔母の家に暮らしていた主人公のハリー・ポッターが、11歳の誕生日に魔法使いの学校であるホグワーツ魔法魔術学校に入学し、同級生のハーマイオニー・グランジャーやロン・ウィーズリーと学びながら、闇の魔法使いヴォルデモートを倒すまでの7年間を描いている。

伊達(2009)は、『ハリー・ポッター』について「現実離れた世界を描いているようでありながら、実は現実を誇張したり、ずらしたりする手法で常に現代社会を反映したり、批判している」(筆者要約)、と述べている。また、『ハリー・ポッター』の特徴の一つとして、魔法使いや人狼のような古典的ファンタジーに見られる空想的存在を用いて、作中の社会独自の差別と偏見にまつわる表現を創造していることが挙げられる。太田(2006)は、作中の創作された差別と偏見について、「イギリス社会を念頭においたと思われる、差別と偏見の様態をファンタジーというオブラートに包んで様々な問題を浮かび上がらせながら、世界のどの地域にも存在する人権上の諸問題を追求しようとしているのではないだろうか」(著者要約)と述べている。

2.2 社会的マイノリティとは

『ハリー・ポッター』シリーズにおける社会的マイノリティについて論じる前に、社会的マイノリティの定義について論じる。二羽(2019)は、社会的マイノリティを

「相互に関係のある人々やそこで共有されている環境によって、弱い立場に置かれている人々」と述べており、社会的マイノリティの一例として女性を挙げて、「女性の方が経済的な力を持っておらず、性犯罪を受けやすい。男性との力関係において、現代日本では女性の方が弱い立場にあり、社会的マイノリティである

(筆者要約)」と解説している。

Schaefer(2011)は、マイノリティグループについて、以下のように説明している。・支配層もしくはマジョリティのグループのメンバーに比べ、自分たちの生活に対する支配力または権力が著しく劣る下位のグループ

- ・数としての少数派に限らない：例：女性、南アフリカの黒人、1920年代のミシシッピとサウスカロライナの黒人
- ・従属集団と互換性がある
- ・社会における彼らの数に比べて不釣り合いなほど（成功、教育、富など）の機会が狭まることを経験するグループ」

(筆者和訳)

これらの資料から、本制作では、社会的マイノリティを「単に人口の少数派ではなく、他のグループと比較して、社会に対する力が劣っており、それによって不利益を被っているグループ」として定義する。

2.2.1 スティグマとは

また、社会的マイノリティと共に、スティグマについても論じる。ハリー・ポッター一作中の社会的マイノリティには、必ず何かしらのスティグマが付き纏うからだ。

国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 地域精神保健・法制度研究部は、スティグマを「スティグマは、日本語の「差別」や「偏見」などに対応しています。具体的には、『精神疾患など個人の持つ特徴に対して、周囲から否定的な意味づけをされ、不当な扱いことをうけること』です。スティグマの歴史は古く、もともとは古代ギリシアで「身分の低い者」や「犯罪者」などを識別するために体に強制的に付けた「印（しるし）」に由来した言葉です。現代では、精神疾患やHIV、LGBTQ（*）のような社会的に立場の弱い人々に対する差別や偏見などを含むような、広い意味を持つ言葉として用いられています。』と説明している。

社会的に立場の弱い人は、その個人の特徴を否定するような差別と偏見の対象になりやすく、『ハリー・ポッター』に登場する社会的マイノリティも、マジョリティによって属性を否定されて、不当に扱われている描写が多い。ハリー・ポッターにおける社会的マイノリティについての、スティグマを含む詳細については以後の項目で述べる。

2.3 『ハリー・ポッター』における社会的マイノリティ

ハリー・ポッターに登場する複数の社会的マイノリティのうち、本制作ではマグルと人狼を分析の対象とする。作中における社会的マイノリティとしての描写が、分析の対象として十分な量の描写がされていることが、選定の基準である

2.3.1 ハリー・ポッターにおける社会的マイノリティとしてのマグルの表現

『ハリー・ポッター』には様々な社会的マイノリティが存在する。その中でも、マグルへの差別の描写はシリーズ全体で描かれている。マグルとは、作中の魔法使いの社会において「非魔法使い」と「非魔法使いの家系出身だが、魔力を持っている魔法使い」を指す作中の社会における造語である。

マグルの魔法使いであることは、魔法使いとして能力の優劣には影響をしない。ハリーの親友でマグルの魔女であるハーマイオニー・グレンジャーは、ホグワーツ魔法魔術学校の同学年で一番の成績で優秀な人物として描写されている。一方で、純血と呼ばれる「血筋には魔法使いしかいないとされている家系に生まれた魔法使い」で劣等生として描かれている登場人物もいる。

この実情にも関わらず、魔法使いの中には純血主義という考え方が存在する。これは純血の魔法使いは、マグルよりも優れているという思想である。純血主義は作中の魔法使い全体の思想ではなく、純血でもマグルに友好的な魔法使いも多く存在し、純血でなくても純血主義に傾倒する者もいる。純血主義者は、マグルに有効的な魔法使いも差別の対象にしており、「血を裏切る者」として呼称することもある。

作中には純血主義者の登場人物は多く存在するが、代表的なのはハリーにとって最大の敵であるヴォルデモートである。ヴォルデモートは、シリーズ全体を通じて純血主義の思想の元に、マグルへの魔法を使った虐殺をしており、魔法使いの社会を純血

だけのものにしようと思っており、ハリーの陣営はそれを阻止しようとしている。このため作品のメインテーマを「純血主義者（反マグル主義者）対反純血主義（親マグル主義）」の構図で、差別と反差別として捉えることができる。坂田（2014）は「人種の異なりによる差別化、区別化を、ローリングは第一に、魔法族か非魔法族「マグル」（Muggle、魔力を持たない人間）かによって表象している。」として魔法使いとマグルの関係性が人種的な隔たりを表象していると述べており、また坂田（2015）は『人種差別を暗示する「マグル（Muggle）生まれ」（と「半純血」（half-blood））への差別を行うだけではなく、同じ「純血」（pureblood）の魔法族のウィーズリー（Weasley）家をも差別の対象にしている。後者の差別意識をもたらしているのは、人種主義ではなく、おそらく階級主義であると考えられる。』と階級闘争のメタファーとして捉えることもできると論じている。『ハリー・ポッター』における純血主義者の魔法使いに対する差別は、現実社会における人種差別、階級格差における差別として読み取ることができる。このことを念頭において、シリーズの各巻ごとにマグルへの差別の描写について分析をする。

2.3.1.1 『ハリーポッターと秘密の部屋』におけるマグルの排除

シリーズ第2巻である『秘密の部屋』で、魔法使いによるマグルへの差別が明らかになる。大昔にホグワーツ魔法魔術学校の創設者の1人で純血主義者であったサラザール・スリザリンが作った秘密の部屋に住むバジリスクという生物を、スリザリンの継承者が操って、校内にいるマグルの学生を石にしていくというテロ行為の謎をハリー達が解明していくというのが本作のあらすじだ。

スリザリンは学校には、純血の生徒のみを受け入れる方針を打ち出し、他の創設者3人に却下された結果、秘密裏にマグルを排除するのに使ったバジリスクを隠すのが秘密の部屋である。このことから、暴力や虐殺に頼ってまでマグルを排除する純血主義者のマグル嫌いの姿勢が理解できる。

さらに、「穢れた血」という言葉が登場する。「穢れた血」とは純血主義者が使う、マグルへの蔑称である。『秘密の部屋』ではハリーの同級生で、純血主義者の家系出身のドラコ・マルフォイが、ハーマイオニーに対して、この蔑称を使った。

マルフォイがハーマイオニーに「穢れた血」と言った際には、周囲が非難のリアクションをした。ハーマイオニーに親しい登場人物はマルフォイに飛びかかろうとしたり、親友のロンはかんかんになって魔法を使ってマルフォイに対し攻撃を仕掛けたりした。このように「穢れた血」は、『ハリー・ポッター』における魔法使いの間では、ひどい差別用語として扱われており、純血主義者のマグルへの根強い差別意識が表れている。

2.3.1.2 『ハリーポッターと死の秘宝』におけるマグルの排除

シリーズ最終巻である『死の秘宝』は、ヴォルデモートが率いる闇の魔法使いが、魔法使いの政治機関であるイギリス魔法省、そしてhogwarts魔法魔術学校を支配する。

ヴォルデモートが乗っ取った魔法省では、マグル生まれ登録委員会が設置され、マグルの魔法使いを、魔法と杖を盗んだとして逮捕・収監した。

ヴォルデモートに支配されたhogwartsでは、マグルの入学は禁止になる。また、在学できる魔法使いも、マグル学という授業が必修になり、「マグルは獣だ、間抜けで汚い、魔法使いにひどい仕打ちをして追いたて、隠れさせたとか自然の秩序がいま再構築されつつある」という内容のものに出席しなければいけなくなる。

2.3.2 『ハリー・ポッター』における社会的マイノリティとしての人狼の表現

『ハリー・ポッター』における人狼は差別と偏見の対象であるが、マグルのように作中の社会では差別問題としては取り上げる魔法使いはほとんどいない。本作における人狼の生物としての特徴は古典的な人狼と同じく、満月の夜になると人間から狼に変身し、その間は適切な薬が処方されなければ善悪の区別が無くなり攻撃的な怪物となる。

J.K.ローリング(2016)は人狼であるルーピンについて、『ルーピンの「狼つき」(狼人間であること)という病は、HIV や AIDS のような、偏見を伴う病気のメタファーでした。』と述べており、作中で人狼が社会的スティグマである病気や障害として扱われていることが分かる。

Roslyn(2010)は J.K.ローリングの人狼の描写に対して、「人狼を障害や病気として文字通りに解釈することを避けて、代わりに障害の社会モデルによる差別として強調する」(著者翻訳及び要約)と指摘している。公益財団法人日本ケアフィット共育機構によると、障害の社会モデルとは「障害が個人の特性ではなく、マイノリティを考慮していない社会や環境のあり方・仕組みと

いった社会的障壁によって作り出されるもの、と捉えること」(筆者要約)である。つまり Roslyn の主張は、J.K.ローリングは、作中において人狼であることの問題は、ルーピン個人にだけでなく、社会的障壁にもあるものとして描写している、ということだ。

これを踏まえて作中でルーピンが直面する社会的障壁を分析することで、人狼そのものの分析につながると考えた。

2.3.2.1 人狼が直面する社会的障壁の表現

作中でルーピンが直面する、人狼であることの不利益として顕著なのは雇用の不平等である。作中でのルーピンの雇用に関する描写を、制度の障壁と観念の障壁という2つの社会的障壁に基づいて分析を行う。

2.3.2.2 制度の障壁

制度の障壁は、十分な社会活動を制限する制度によってもたらされる社会的障壁のことである。『不死鳥の騎士団』で、作中の社会には反人狼法という法律があることが言及される。魔法使いの政治機関である魔法省の官僚であり、マグルや人狼に対して差別的な思想を持つドロレス・アンブリッジが起草したものである。これによって人狼はほとんど就職不可能になっている。

2.3.2.3 観念の障壁

観念の障壁は、障害に対する偏見、無知、無関心等、そのような考え方や態度があることで平等な社会参加を妨げる社会的障壁のことである。

リーマス・ルーピンの魔法使いとしての高い能力は、『アズカバンの囚人』で描かれている。ハリー・ポッターが通っている、hogwarts魔法魔術学校で、闇の魔術に対する防衛術という科目の教師に就任し、授業開始初期から一番人気の授業になった。また、非常に高度な魔法である守護霊の呪文を、13歳のハリーに教授することに成功した。しかし、このような能力を持っていたとしても、ルーピンに向けられる偏見を覆すことはできない。

ルーピンがhogwarts魔法魔術学校を卒業し、教師として就任するまでの期間の就職面の状況についてJ.K.ローリング(2016)は、「自身が人狼であると同僚に悟られることを恐れて、自身の能力より遥かに劣る単純な仕事を転々としながら、その暮らしをするようになります。」(著者要約)と表現している。この時期はまだ反人狼法が制定されていないため、制度の障壁もま

だ無い。しかし、人々の人狼への差別が、ルーピンに適切な就職を自重させており、結果として雇用の不平等になっている。

また、『アズカバンの囚人』でルーピンが有能な教師として就任している間、自身が人狼であることは生徒や保護者には明かしていなかったが、終盤で魔法薬学の教授であるセブルス・スネイプが、人狼であることを校内でアウティングする。それをきっかけにルーピンは辞職をする。生徒の保護者が人狼に子供が教わることを望まず、抗議することを考えての判断である。この保護者の反応は、人狼が就職していることに対する作中の社会の強い拒絶反応と、それによってもたらされる人狼の大きな不利益を示唆している。

2.4 『ハリー・ポッター』における社会的マイノリティの表現の分析の結果

今回、分析の対象とした作中の社会的マイノリティの中で、マグルは「人種・階級闘争」、人狼は「障害・病気」に関連した社会的マイノリティである。彼らに向けられるテロ行為のような暴力行為、蔑称を用いた誹謗中傷、政治機関による人種隔離政策、教育の場での偏見の流布など、社会的マイノリティが受ける差別や偏見を多種多様に、いずれもリアリティを持って描写していることがわかった。この分析を、自身の作品の制作に適応することにした。

2.5 制作にあたってのハリー・ポッターの問題点

筆者の制作に上記で論じたハリー・ポッターにおける社会的マイノリティの表現手法を、日本における社会的マイノリティを表現するデザインの制作に適応するにあたって、『『ハリー・ポッター』はイギリスの社会をバックグラウンドに持つ作品である』ということ踏まえる必要があると考えた。例えば、上記で論じたマグルが表象しているとされている階級闘争であるが、階級社会であるイギリスのバックグラウンドがある表象を、一億総中流社会と称されることもある日本の社会の表現にそのまま流用することは適切ではない。地理、言語、文化、政治制度などを含めて日本とイギリスの社会は違う。社会に違いがあるとなれば、イギリスの社会的マイノリティと日本の社会的マイノリティは異なる。社会的マイノリティというものが、所属する社会、地域、時代によって変化するものであるからだ。本制作は、『ハリー・ポッター』のお

ける差別される側を架空の存在に置き換える手法を採用しつつも、日本社会における社会的マイノリティの分析に基づいて表現する。

日本における社会的マイノリティを表現するにあたっては、現実の日本社会における社会的マイノリティが遭遇する具体的な事例を参照する。具体的な事例の参照と、それを踏

まえて作った作品の解説については、第5章の作品解説で具体的に述べる。

2.6 『ハリー・ポッター』シリーズにおける社会的マイノリティのまとめ

本項では、『ハリー・ポッター』における被差別の主体を置き換える表現について分析を行った。架空の存在を用いつつ、現実社会とリンクするような詳細で多様な社会的マイノリティの差別を表現していることが分かった。一方で、イギリス社会のバックグラウンドを持つ『ハリー・ポッター』の表現を参考にするは、文化や違いについて注意する必要がある。

次章では、本章における分析を踏まえた作品制作においての、制作目標を設定と、その目標を達成するにはどのような作品形式が適切かについての検討を述べる。

第3章 メディアとしてのポスターとポスター展について

第2章で行った『ハリー・ポッター』の分析を踏まえた上で、被差別の主体を架空の存在に置き換える表現手法を、小説や映画の以外のメディア形式のオリジナルのデザイン作品に応用することにした。

本制作を開始するにあたり、最初に作品制作の目的を明確にすることにした。その結果「架空の存在がいる、架空の社会を想定し、その架空の存在が社会的マイノリティとして体験する差別や偏見の体験を可視化することで、鑑賞者が親しみを持って日本の社会的マイノリティについて考えることができる」制作を目指すことにした。さらに、『ハリー・ポッター』のように、現実社会とは架空の社会への没入感を持ち込ませることも目標にした。

その目標を達成できる形式を選定した結果、ポスター展の形式を選んだ。以降の項目では、ポスター展の形式を選定した経緯について述べる。

3.1 本制作のメディアの形式としてのポスターの検討

被差別の主体を架空の存在に置き換える表現として、制作の最終段階では、ポスター展を制作をしたが、制作の初期段階ではポスター制作のみを行おうと考えた。ポスターを選定した理由について、「映画版『ハリー・ポッター』におけるグラフィックデザインの効果」、「社会を反映するポスターの性質」の観点から解説する。また、筆者の制作目標をする上での、ポスターのみによる表現の限界についても述べる。

3.1.2 ハリー・ポッターにおけるグラフィックデザインの効果

『ハリー・ポッター』では、魔法使いらしい独特の文化が多くあるものの、魔法使いが商業や行政などで現代的な社会を運営している。このため、作中の社会には現実社会と同じように沢山のポスター、ブックカバー、商品などが存在する。マグル差別のプロパガンダにもメディアが使われ、「死の秘宝」では「穢れ血-平和な純血社会にもたらされる危険について」というパンフレットが登場したりもする。

映画版では、専属のグラフィックデザイナーが、それらを実際に制作して小道具として登場させる。古典的なファンタジーらしいモチーフと、現代的に洗練されたデザイナーの技術が組み合わさったグラフィックデザインは、「もし魔法使いが現代で社

会を営んでいたらこうなる」というイメージを、鑑賞者が現実的なものとして受けとれるようにする効果を持つものになっている。

本制作では、架空の社会における差別や偏見を描写するにあたって、映画版『ハリー・ポッター』のようにグラフィックデザインによる表現を行いたいと考えた。

3.1.3 社会を反映するポスターの性質

土田（2005）は第一次世界大戦時のアメリカのプロパガンダポスターについて「アメリカ政府は第一次世界大戦に参戦した際に、広報委員会（the Committee on Public Information）を設置し、戦争に関するニュースや特集記事、戦意高揚のための映画の制作、敵意を煽るようなパンフレットの制作など、多様なメディアを複合した宣伝活動に従事した。国民の愛国心に訴え、自ら進んで政府に協力しようとするために、どのメディアが宣伝活動に最も有効かという議論が行われ、委員長に任命されたジョージ・クリール（George Creel）は「人々は印刷された文字は読まないかもしれないし、集会や映画の上映には足を運ばないかもしれないが、街頭に貼られたポスターであれば、無関心な人の目もとらえることができるはずである」と考えた」（筆者要約）と述べている。

第一次世界大戦におけるプロパガンダのメディアとして、ポスターが積極的に採用されたことは、ポスターには高い公共性が要因であると分析する。

テレビやラジオ、映画、第一次世界大戦後に誕生したメディアであるインターネットは、基本的に個人の関心に基づいて利用するため、興味のないコンテンツを拒絶することができる。

ポスターの多くは公共の場に固定されており、またその視認性短時間で全体像を把握できるため、目に入りやすく、鑑賞者が意図していなかったとしても情報を受け取ってしまうこともある。この点において、ポスターは高い公共性を持つと分析する。

これは、ポスターのメリットであり、問題点でもある。例えば、性的なイラストが描かれたポスターが、「公共の場での相応しい表現ではない」として議論を呼ぶのは、ポスターが公共性の高いメディアであることが原因であると筆者は推測する。鑑

賞者の意思に関係無く目に入ってくる、ポスターのメディアとしての性質を表している。

高い公共性を持つメディアであるポスターは、制作された地域や時代の社会を部分的に反映しているメディアである。

例えば、アンシャン・レジーム（フランス革命が起こる以前の16～18世紀のフランスの社会体制）期には、ポスターを用いた広告形態が存在した。アラン・ヴェイユ

（1994）は、当時のポスターの種類について「王の告示」、「協会の告示」、「物語性の強い主張あるいは図解」、「観劇ポスター」、「初期の商業ポスター」を挙げている。王国を統治する諸法についての王の告示のポスターは、当時の絶対王政の社会を反映している。

世界大戦中のアメリカにおいても戦争プロパガンダのポスターが制作されたが、それは当時の戦争、戦争を賛美する政府、その政府が主導となっていた全国を対象とした広報機関の存在がある。

ポスターそれぞれの「ポスターデザインの内容」、「制作した人物や団体」、「制作の目的」などが、制作された時代や地域の社会の一部を反映していると言える。

3.1.4 ポスターのメディア分析のまとめ

「架空の存在がいる、架空の社会を想定し、その架空の存在が社会的マイノリティとして体験する差別や偏見の体験を可視化することで、鑑賞者が親しみを持って日本の社会的マイノリティについて考えることができる」制作のメディアとして、以下の分析の考察に基づいて、ポスターを使用することにした。

- ・ 架空の世界を表現するにあたり、その世界で使用されている出版物や広告を、デザインし制作することで、架空の世界に対する没入観を鑑賞者に与え、リアリティを持たせることができる。

- ・ ポスターは制作された時代や地域の社会像の一部を反映するメディアであり、架空の社会を鑑賞者に伝える方法として、その特性を利用することができる。

3.1.5 ポスターのみの制作の限界

制作のメディアとしてポスターを使用することを決めたが、ポスターだけを鑑賞させるのでは、筆者の制作目標を達成するには限界があると考えた。ポスターは社会像の一部を反映するメディアであるが、反映できるものの内容には限りがある。「ポスターが制作されるに至った出来事の文脈」、「デザイン以外の、制作者のようなポスターの情報」、「ポスターを見た人たちが、どのように思ったのか」などは、ポスターのみを鑑賞するだけでは、正確には理解することができない。

また、本制作は架空の社会におけるポスターであるため、鑑賞するにあたって、前提として共有すべき設定の解説も必要である

社会的障壁の諸相や、差別や偏見を取り巻く環境を浮かび上がせるにあたっては、制作したポスターの、バックグラウンドを鑑賞者が理解できる工夫が必要であると考えた。

3.2 本制作のメディアの形式としてのポスター展の検討

3.1.6 で取り上げた問題点を解決するために、複数のポスターや、補足の資料から構成されているポスター展という形式を採用することにした。

ポスター展とは、主催者が設定したテーマに基づいて収集したポスターを展示する展覧会のことである。

ポスターのみでは、表現に制限がある架空の社会的マイノリティを、「複数のポスターによる社会の文脈の提示」、「キャプションによる作品の解説」、「資料による補足」で構成されるポスター展の形式で表現することを検討した。具体的な検討の内容については、以下の項目で述べる。

3.2.1 複数のポスターによる社会の文脈の提示

ポスター単体ではなく、同じ社会で制作され複数枚のポスターを展示することで、社会の文脈を提示できると考えた。

例えば、日本における化粧品に関するポスターを、制作された時系列に沿って展示すると、日本社会における美の基準や女性の社会的環境の変遷を理解することができるかと推測する。

このように時間軸に沿って複数のポスターを展示することによって、ポスターが反映する社会の文脈を捉えやすくなると考えた。

3.2.2 作品を解説するキャプション

一般的に、展覧会で展示されている図、写真、作品には解説するキャプションが添えられている。キャプションの内容は展覧会によって様々であるが作品のタイトル、作者、作者のコメント、作品解説などが載っている。

本制作では、ポスター単体だけで、理解することができない、ポスターの作品名、作品の概要、製作者、制作年、制作の背景といった情報をキャプションによって解説をする。

3.2.3 資料による補足

一般的に、展覧会には、メインとなる作品以外にも、作品に関連する資料が展示されることがある。例えば、展示されている作品が発表された当時の批評の記事などを一緒に展示することによって、作品の社会における位置づけを鑑賞者に提示することができる。本制作においても、補足資料を制作することによって、架空の社会における、ポスターの位置づけを提示することにした。

3.3 メディアとしてのポスターとポスター展についてのまとめ

本項では、被差別の主体を架空の存在に置き換える制作をする上で、ポスター展の形式を採用するに至った経緯について解説した。

「ハリー・ポッターにおけるグラフィックデザインの効果」と「社会を反映するポスター」としての観点から、ポスターを制作することに決めた。しかし、ポスター単体の展示では、鑑賞者に伝えられることが限られるため、「複数のポスター」、「キャプション」、

「補足資料」で構成するポスター展の形式を採用することで、架空の社会的マイノリティの詳細を表現できると考えた。

作品の形式が定まったところで、次に作品の内容を考える上で、社会的マイノリティとメディアの関係について考える必要があると考えた。『ハリー・ポッター』で

は、小説のストーリーで政治全体における社会的マイノリティを表現したが、本制作ではメディアにおける社会的マイノリティの扱われ方に注視するからである。

第4章 日本の社会的マイノリティとメディア

制作において、架空の社会的マイノリティが遭遇する差別や偏見をポスター展の形式で表現するにあたり、現実の日本における社会的マイノリティとメディアの関係について論じる。

社会的に不利な立場にある人は、メディアにおいても差別の対象になる。内野(1990)はマスメディアにおける差別的表現について「被差別民、障害者、一定の人種・民族などを差別、侮辱、蔑視あるいはそれを助長する表現」と定義し、「差別された人の心を傷つける効果と、差別意識を助長する効果を持つ」と述べている。差別的表現は被差別者に対する攻撃であるだけでなく、鑑賞者に差別意識を植え付ける機能もあることを考えることが重要である。メディアでの、社会的マイノリティに対する差別や偏見について例を挙げて分析する以下で論じる。

4.1 メディアにおける社会的マイノリティに対するヘイトスピーチ

メディアにおける差別的表現の中には、ヘイトスピーチが含まれる。口頭のスピーチだけではなく、インターネットや書籍などのメディアを問わずに、特定の属性を攻撃したり、排除したりしようとする表現をヘイトスピーチと表現する。法務省はヘイトスピーチについて、以下のように説明している。

- (1)特定の民族や国籍の人々を、合理的な理由なく、一律に排除・排斥することをあおり立てるもの（「〇〇人は出て行け」、「祖国へ帰れ」など）
- (2)特定の民族や国籍に属する人々に対して危害を加えるとするもの「〇〇人は殺せ」、「〇〇人は海に投げ込め」など）
- (3)特定の国や地域の出身である人を、著しく見下すような内容のもの（特定の国の出身者を、差別的な意味合いで昆虫や動物に例えるものなど）」と説明している。

4.2 ステレオタイプ

ステレオタイプはある属性をカテゴリー化し、思い込みや固定観念に基づいたイメージのことである。例えば、「女性は文系が得意で、男性は理系が得意な人が多い」というような、ジェンダーと得意分野を結びつけることもステレオタイプである。

ステレオタイプの弊害について、福島県男女共生課は「固定観念（ステレオタイプ）による思い込みや決めつけがマイナスの感情と結びつくと偏見になり、ある特定の

属性を有しているという理由だけで嫌ったり避けたりして差別を生み出すことがあります。」と述べている。

ステレオタイプとメディアの関係について、手塚ら（2022）は「メディアの制作者は私たちのステレオタイプを利用し、情報を構成している。オーディエンスもまたメディアと自分自身の経験を比べ、ステレオタイプを利用し、メディアからの情報を判断している。私たちがメディアからの情報を判断する際にはステレオタイプが入り込む可能性を自覚し、冷静に判断する態度を身に付けさせる教育が必要であると考えられる。」と述べており、メディアでは制作者もオーディエンスも何かしらのステレオタイプを利用していることがわかる。

メディアにおけるステレオタイプがマイナスの感情に結びつくことに関連して、2019年にイギリスの広告基準協議会（ASA）は、「深刻もしくは広範な被害」につながる可能性のある「性別にもとづく有害なステレオタイプ（世間的固定概念）」を広める広告をイギリスで禁止していると、BBC NEWS JAPAN が 2019 年に報じている。この規制は全ての性別にもとづくステレオタイプ表現を禁止しているわけではなく、予防すべき「一部の具体的な害」を特定することが目的である。一部のステレオタイプに基づく表現が、「人の可能性を狭める」一端を担いかねないとしている。

『ハリー・ポッター』シリーズでも、現実社会におけるジェンダーステレオタイプに基づく表現が見られる。特に、登場人物の女性像のステレオタイプ化された描写が指摘されている。坂田(2015)は、母親として描かれている女性が最も好ましい存在として扱われている点や、作中のキャリア・ウーマンは、家庭を顧みない存在として否定的に描かれる傾向などの伝統的、保守的な女性観が散見される点について「ファンタジー小説『ハリー・ポッター』の仮想の世界、魔法界にも、性差による社会的役割分担への人々の期待を垣間見ることができるようになっており、読者は現実世界の差別意識を思い起こさせられる。」と述べている。

坂田の分析は小説版に基づくものであるが、映画版でも女性キャラクターの描かれ方は同じである。『ハリー・ポッター』シリーズは、映画版も世界トップクラスの興行収入であり、いずれにしても人々に大きい影響力があるメディアである。筆者は『ハリー・ポッター』は反差別がテーマの作品であると、第 2 章で考察したが、坂田

の分析によると、女性像について差別的なイメージを発信した側面があることも理解することができる。

4.3 日本の社会的マイノリティとメディアの関係のまとめ

以上の項目では、メディアにおける社会的マイノリティの差別について述べた。例に挙げたもの以外にも、社会的マイノリティがメディアで差別的に扱われた事例は多くある。

メディアにおける社会的マイノリティに関する表現において問題なのは、社会的マイノリティの当事者を傷つけたり、当事者以外の人に社会的マイノリティに対する差別意識を持つことを助長したりする表現があることである。

その表現にはヘイトスピーチのように分かりやすく攻撃的なものであったり、女性のステレオタイプのように、社会的マイノリティの社会での可能性を狭める表現であったり、その形態は様々である。

本制作では、この章における分析を踏まえ、現実の日本の社会における、社会的マイノリティを排除する表現がどのように問題で、社会的マイノリティへの不利益を与えているかを、鑑賞者に理解できるような作品作りを目指す。具体的な制作の内容については次の章で述べる。

第5章 本制作における「架空の社会的マイノリティとしての人狼」と「架空の社会としての2030-2040年代の日本」の設定

第2章から第4章までの分析を踏まえて、「架空の社会における、架空の社会的マイノリティの社会から排除や包括」を表現するにあたり、本制作では「架空の社会で制作された、架空の社会的マイノリティの排除と包摂まつわるポスターを展示する架空のポスター展」を制作することにした。

制作の初めに、本制作における「架空のマイノリティ」と「架空の社会」の詳細を決めることにした。そして、本制作における架空の社会的マイノリティには人狼、架空の社会には、2030年以降の架空の未来の日本を設定した。本章では、その理由と具体的な内容について解説する。

5.1 架空の社会的マイノリティとして人狼を選定した理由

満月の夜になると狼に変身する人間である人狼を、本制作における架空の社会的マイノリティとして用いることにした。人狼は、第2章で述べた通りに障害者や病気を持つ社会的マイノリティのメタファーとして、『ハリー・ポッター』も用いられているが、本制作において、人狼を用いたのには以下の理由がある。

- (1) 架空の存在であるが、人間である。架空の存在を用いて社会的マイノリティについて論じるにあたっては、人権がある人間であることが必須の条件である。人狼は満月の夜に変身するものの人間であるために、この条件に当てはまる。
- (2) ネガティブな偏見を抱かれやすい存在である。既存の人狼のフィクションでは、人狼や狼は攻撃的な存在として描かれている。人狼は、現実社会においても人間にとっては危険な動物である狼に変身するなど、ネガティブな印象を抱かれやすいと考えた。

以上の理由で、本制作では人狼を用いることにした。

5.2 人狼が登場する架空の社会として2030-2040年代の日本を設定した理由

5.1 で述べた人狼が登場する社会は、架空の 2030 年以降の日本を舞台とするものとした。日本における社会的マイノリティを表現する上で、日本が舞台であることは必須である。さらに、鑑賞者に現代の現実社会の問題提起を行いたため、現実の現代と地続きになっている社会を描ける設定でなければならない。

これらの条件を達成できる架空の社会として「架空の将来の日本」を設定した。

5.2 本制作における「人狼」の設定の解説

人狼は数多くの伝承やフィクションで、作品の題材とされており、その作品ごとに人狼の特徴についての設定が存在する。

例えば、『ハリー・ポッター』では、人狼になる原因は「人狼の唾液が血液と混じる」ことであり、変身した状態では「善悪の区別がつかなくなる」ことになっているが、「適切な薬を飲めばある程度の症状は抑えられる」としている。

本制作における、人狼の設定は以下の表 1 にまとめた通りである。

表 1 本制作における人狼の設定

人が人狼になる原因	不明
狼に変身するきっかけ	満月の光に照らされる
変身した状態での人格	人間としての人格や知能を保っている
人狼の症状の改善案	なし
人狼の弱点	玉ねぎやチョコレートが食べられなくなる

本制作における人狼の設定で特徴的なのは、暴力的な要素を排したことである。『ハリー・ポッター』を含む既存のフィクションに見られる、人狼が変身すれば暴力的な獣になってしまう設定は、社会的マイノリティを描く上では問題があると考えたからだ。他人に暴力をふるうモンスターに変身する存在に対して、人々が社会的にも距離をとることは正当な防衛反応だとみなされる可能性があるからだ。本制作における人狼は、狼に変身した状態であったとしても、人間らしさを保持した、非暴力的な存在とする。

人狼の弱点に、玉ねぎやチョコレートが食べられないという設定も追加した。狼を含む犬科の生き物はこれらの強いアレルギー反応を起こし、死亡することもある。この設定により、狼人間の生活の制限も反映できると考えた。

5.3 本制作における「2030年代以降の日本」の設定の解説

本項では、本制作で設定した「人狼が存在する2030-2040年代の日本」について、時期と人狼の社会的立ち位置を対応させた表2を参照しながら解説を行う。

表2 本制作における「2030年代以降の日本」と「社会での人狼の立ち位置」の対応表

時期	社会における人狼の立ち位置
2030年代初期	人狼になる人が出てくる。社会において人狼は正しく認知されておらず、未知の奇病として扱われている。
2030年代中期	人狼の存在が広く認知される一方で、差別の対象となり、暴力行為や誹謗中傷が行われる。
2040年代後期	人狼に対する露骨な差別は、社会では無くなりつつある。一方で、人狼に対する悪意の無いものも含む偏見は、世間に広まっているままである。
2040年代	人狼に対する人権意識が高まり、活動や社会制度への変革が始まる。

本制作で表現する時期を「2030年代初期」、「2030年代中期」、「2030年代後期」、「2040年代」の4つに区分することで、架空の社会における人狼に対する価値観の変遷の表現を試みた。時期によって社会が変われば、社会的マイノリティの立ち位置も変化するからである。

(1) 2030年代初期の設定

2030年代に、人狼になる人が出てくる。人狼当事者達は、世間に自分の正体が明かされないように、満月の夜になると、人目のつかないところに避難をしていた。人狼であることは社会に知られることはなかったものの、世間は定期的に多くの人が失踪す

る現象を「家出症」という奇病として捉えた。未知のもの、正体が明らかになっていないものに対して日本社会がどのように反映するかをこの年代のポスターで表現する。

(2) 2030年代中期の設定

2030年代中期になると、人狼の存在も広く知れ渡ることになる。一部の人々は、人狼は日本社会を脅かす異物であると捉えて、攻撃の対象とする。日本で排他的な考えを持つ人が、どのような差別を生み出すのかをこの年代のポスターで表現する。

(3) 2030年代後期の設定

2030年代後期になると、中期と比較して、露骨な差別は減少する。一方で、人狼に対して悪意を持たない人が、無意識に発信する「人狼はこういうものだ」という偏見は、社会に広がったままである。差別をしようするという人だけが差別するのではなく、意図せず特定の属性を排除するような言動をしてしまうことをこの年代のポスターで表現する。

(4) 2040年代の設定

人狼が、差別的な扱いを受け続けてきた2030年代に対して、2040年代は人狼の人権意識の高まり、それによる社会の変化が起きる。社会的マイノリティにおける差別や排除だけを表現するのではなく、社会的マイノリティを包摂する社会を作ろうとする人々がいることを、この年代のポスターで表現し、鑑賞者に希望を持ってもらいたいと考えた。

5.4 本制作における「架空の社会的マイノリティとしての人狼」と「架空の社会としての2030年以降の日本」のまとめ

本制作における社会的マイノリティとして、架空の存在でありながら人間である人狼を用いることにした。人狼の設定では、社会的マイノリティを表現する上で問題になる、既存のものに見られる暴力的な要素を排した。

架空の社会としては、2030年以降の日本を設定した。表現する時期を「2030年代初

期」、「2030年代中期」、「2030年代後期」、「2040年代」の4段階に分けることで、社会の人狼に対する価値観の変遷を表現する。

次項では、実際に制作した、2030年以降の日本における、人狼にまつわるポスターを解説する。

第6章 架空の社会的マイノリティとしての人狼を表現したポスターについての解説

前章で述べたように、人狼が社会的マイノリティとして扱われている架空の2030-2040年代のポスターを制作する。

制作したポスターは、第5章で紹介した「2030年代初期」、「2030年代中期」、「2030年代後期」、「2040年代」のいずれかの年代における、人狼の社会での扱われ方を表現している。

6.1 2030年代初期のポスター

この時期は、人狼について当事者以外が、その存在をよく理解していないものの、「家出症」と称して、正体不明の奇病が流行しているとして恐れていたという設定である。この時期のポスターは、病気を発端とする差別を、「擬似科学」、「靈感商法」で表現している。

本制作における、2030年代初期のポスターは、病気は偏見を生む日本社会の背景を表現している。以下の項目で、その詳細について論じる。



図1 擬似科学の保健知識を宣伝する団体が出した「左手とウイルス感染しやすい」とい

うデマを宣伝するポスター

無病息災を科学的に手に入れる

前世で犯した罪が発する病原波動から解放される!!!

疫病波封印呪回数券
「家出症」にも効果があるかを検討中!

数多くのベストセラー呪符を手がけた驚雲社と、波動物理学者の権威のイギリス・マエントシ大学でクジン・ガイコ教授が監修。前世の罪が放つ波動を無効化するマークチャーリーウォンタを、ショットウメイムで加工。病原波動を精算する効果があります。

※主に「家出症」・「疫症」を。効果測定では「いい」値がある人数は前世で何人か大なる罪を犯しているケースが多いので、本人や該当する発症が病気の原因は必ずしも前世での罪が原因です。

疫病波封印呪回数券 料金表
200アーナイ×10
7000円
500アーナイ×10
14000円
500アーナイ×20
25000円
1000アーナイ×20
49000円
1000アーナイ×40
97248円

ああ! ついに完治できました!
「前世を精算し、解放されましたね。右下と左上と左下の親知らずから」

ああ! ついに完治できました!
「前世を精算し、解放されましたね。右下と左上と左下の親知らずから」

図2 靈感商法の商品を販売する会社の「家出症を含む病気を治せるアイテム」の宣伝ポスター



図3 デマの流布によって価格が高騰する穀物酢のチラシポスター

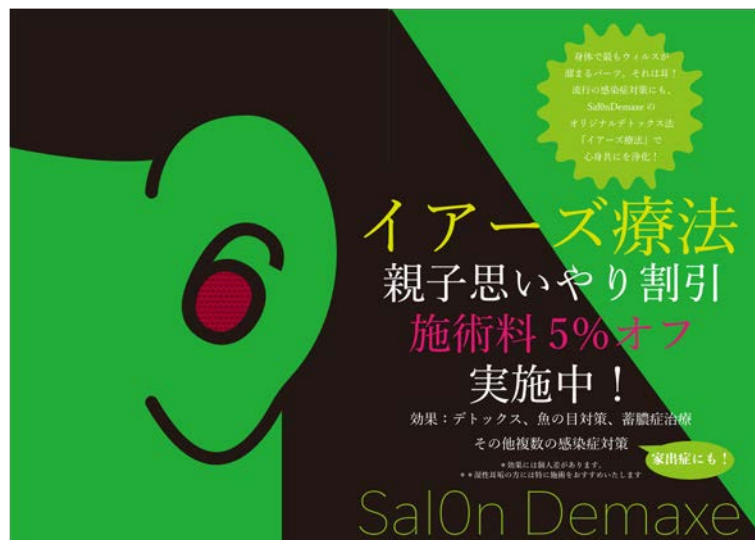


図4 家出症が治るといふ根拠のない療法を宣伝するサロンが制作した宣伝ポスター

6.1.1 マイノリティと病気の結びつけ

図1のポスターには「左利きはウイルスが付きやすい」、図2のポスターには「左利き、湿性耳垢、30歳未満でほうれい線がある人物は前世で罪を犯している」、図4に

は「湿性耳垢の人物に療法を特に勧める」といった内容が載っている。いずれも、特定の特徴がある人物と病気を結びつけている。

病気と偏見や差別の関係について、まず、コロナを例に挙げて論じる。アメリカ心理学会は、『歴史的に見て、伝染病やパンデミックは、偏見や差別を誘発しがちです。かつては、エボラやMERSのような病気がそうであり、現在では新型コロナウイルス(COVID-19)が該当します。新型コロナウイルスの流行後、アメリカでは、アジア系と思われる人々に対する偏見、嫌がらせ、いじめを報道するニュースが増えています。ウイルスの起源は中国の特定地域に関連するようですが、特定の人種や民族で感染や拡散のリスクが高いわけではありません。新型コロナウイルスを中国や中国国内の特定地域に関連付けること、例えば「チャイナウイルス」や「武漢ウイルス」などと呼称することは、偏見や差別を助長することになります。そのため、世界保健機関(WHO)は、伝染病を特定地域に結びつけることを強く反対し、すべての政府機関がその使用を控えるよう求めています。』(日本心理学会 藤島喜嗣、樋口匡貴、平石界、三浦麻子翻訳)という情報を発信している。このように病気が流行すると、その病気とある属性を結びつけて差別を生むことがある。

次に、日本におけるHIVを例に挙げる。五島は、イギリスと比較して、日本のHIV共生が遅れている点について指摘して『「怖い」「そういう人とはできるだけ会いたくない」「あれは遊んでいる人の問題」だとか、あるいは「外国人や男性同性愛者の問題」などにとらえてしまっている現状があります。そうした様々な人権問題が複合的に重なり合って、エイズにかかわる差別をつくってしまっているのです。』と述べており、社会的認識や、人権感覚が差別を作っているとしている。

このように、病気とある属性を結びつけて、差別や偏見を生む事例は日本を含む世界で見られる。

図1、2、4のポスターでは、左利き、湿性耳垢、30歳でほうれい線がある人が、「家出症になりやすい特徴の人」として取り扱われている。身体的特徴としては少数派である、左利き、湿性耳垢、30歳以下でほうれい線がある人物を病気と結びつけたポスターの内容は、病気に対する差別的な社会の反応を示唆している。

これらのポスターは、現実社会の日本において、病気(家出症)と人の属性を無理やり結びつけて差別や偏見の対象にする現象を表現している。

6.1.2 科学的根拠の無い情報発信

図3は、「酢が家出症感染者の判別に効く」というデマによって価格が高騰した穀物酢である。このデマの内容の詳細については、ポスター展の資料で補足するものである。図A、B、C、Dのいずれも、科学的な根拠に基づく情報の発信を行っていない。いずれも、偏見やデマの情報である。

現実社会の日本のコロナ禍において医療従事者、配送業者、感染者、に対する差別やいじめが生まれた背景について、田南(2020)は「新型コロナウイルスに対する正しい知識を持たないことから、過度に不安や恐れを抱いてしまい、過剰な行動に走ってしまう。」と述べ、さらに「これは非常に重大な人権問題です。私が関わってきたハンセン病の問題では、誤った理解のもとに患者、回復者とその家族に対し、社会からのけ者にする、法律で強制的に隔離するなどといった差別が日本で90年以上も行われてきました。現在、起こっている『コロナ差別』にも通ずるような気がします」と述べている。

病気に対して差別や偏見のない社会については、正しい情報の流布が必要である。それを妨害するデマ、擬似科学、靈感商法などは、人が科学的根拠に基づく正しい知識を得ることを妨害しているといえ、間接的に病気に関連する差別を助長していると言える。

この科学的根拠の無い情報の流布が、差別に与える影響を、2030年代初期のポスターは表現している。

6.2 2030年代中期のポスターの解説

この時期では、人狼の存在が日本社会について認知されるに連れて、人狼が露骨な差別の対象となっているという設定である。

この年代のポスターでは、日本における社会的マイノリティが遭遇する暴力や誹謗中について表現する。

6.2.1 「ワーウルフ ID マーク認知のお願い」のポスターの解説



図5 架空の政治機関が制作した人狼を識別する ID マークを周知するポスター

図5は、「満月の夜に狼に変身した状態の人狼」を識別するための ID マークを周知するポスターでの発行元は、保健食糧局という架空の政治機関である。ポスター配布の理由は、満月の夜に災害が起きた際に、狼の姿で屋外に避難した人狼の死者が報告されたことである。死亡の原因は「変身中に災害になったことによるパニック」「人狼だと知られることを恐れた逃げ遅れ」、「避難中に狼を見た地域民による暴行」とされている。

このポスターが表現しているのは、現実社会における「災害弱者」や「災害時要援護者」である。

札幌市（2022）は災害時用援護者について、「災害が発生した場合、安全な場所への避難行動や避難場所での生活において大きな困難が生じ、まわりの人の手助けを必要とする人たちを「災害時要援護者」といいます。これらの人たちには、災害時に特別な配慮が必要となる」人として定義し、

- ・ 移動が困難な人
- ・ 車いす、補聴器などの装具を必要とする人

- ・ 情報を入手したり、発信したりすることが困難な人
- ・ 急激な状況の変化に対応が困難な人
- ・ 薬や医療装置が常に必要な人
- ・ 精神的な不安定になりやすい人

などを例に挙げて、高齢者、心身障害者、妊婦、乳幼児、外国人が該当すると述べている。

高齢者、心身障害者、妊婦、乳幼児、外国人は震災における社会的マイノリティとして、防災や避難時に特別な対応が必要であり、不備があると避難が遅れたり、死亡に繋がったりする。

もし人狼が狼に変身した状態で震災が起きた際には、急激な変化に対応することや、避難に関する情報を入手することが困難になり、精神的に不安定になりやすいと考え、人狼は災害時要支援者もしくは災害弱者になると想定し、その際に人狼に必要な支援は、人狼に対する周囲の理解の促進であると考えた。

これらを踏まえ、狼に変身した人狼を識別するマークの周知によって、積極的な支援を促すポスターを制作した。

6.2.2 人狼を誹謗中傷する保守系雑誌の広告ポスターの解説

図6は、架空の保守系雑誌「月刊 OMAIU」の広告ポスターである。人狼が人狼では無い人々を搾取しているという特集をはじめとして、人狼に対するネガティブな記事を載せている。



図6 人狼を誹謗中傷する記事を掲載する架空の保守系雑誌の広告ポスター

このポスターが表現するのは、現実の日本で発刊されている「Will」や「Hanada」、休刊中の「新潮45」ような保守系雑誌である。これらの雑誌は中国や韓国、性的少数派、リベラル層に対するヘイトを扇動するような言論が多く特集されている。

例えば、「新潮45」の2018年8月号には、杉田水脈の、「LGBTQは子供を作らないため、生産性が無い」という性的マイノリティに対する差別的な記事を書いた事例もある。

これらのメディアにおける言論は、日本に住んでいる外国人や、自身のルーツが外国にある人、性的少数派といった社会的マイノリティへの差別である。

もし、日本に人狼がいたら、このような保守系言論メディアの誹謗中傷の対象になると考えた。外国人や性的少数派にヘイト的な言論を投げかけられる人々は、人狼を同様に嫌悪すると考え、差別的な記事が載せられている架空の保守系雑誌の広告ポスターを制作した。

6.2.3 人狼に対する差別的な活動を行う団体が発行するポスターの解説

図7は、人狼に対して差別的な活動を行う架空の団体である、「北海道市民警備会」のポスターである。日本における差別団体としては、在日特権を許さない市民の会、通称在特会が挙げられる。脇阪（2014）は『『近年、日本社会で注目を集めているのが、行動保守を名乗る団体による「ヘイトスピーチ」である。最も過激な「在日特権を許さない市民の会」（以下、在特会と記す）は、東京・新大久保や大阪・鶴橋のコリアタウンなど全国各地で在日韓国・朝鮮人に対する差別扇動を繰り返している。

「いい朝鮮人も悪い朝鮮人もぶっ殺せ!」「ゴキブリ朝鮮人を日本からただき出せ!」こんな言葉を叫びながら街宣し、その映像をインターネットの動画配信サイトに流す。それを見れば、誰もが差別表現の激しさとあまりの醜悪さに驚愕することだろう。筆者もまさにそうした一人であり、これは許容範囲を超えていると感じた。在特会は、ブログや動画配信サイトなどのネットメディアが生み出した新しい社会運動である。憎悪や敵意を含んだ言葉がネット空間からリアルな社会にあふれ出し、それがまたネット空間に還流して、憎悪の種を社会にまき散らしている。

「ヘイトスピーチ」を「社会のマイノリティ集団に対する差別や偏見をあおり、広める言動」と定義するならば、在特会の言動はまさしくそれにあたるのは言うまでもない。』と解説している。

北海道市民警備会は在特会をモデルにしており、人狼に対する嫌悪感やネガティブなイメージを煽るようなキャンペーンを行っている団体という設定である。不気味な男の顔のイラスト共に、「大雨災害で窃盗を働いた」というメッセージを伝えているが、これは社会の一部の人が持つ、人狼に対しての強い差別意識の現れである。

！
備会



図 7 人狼に対して排他的な活動を行う団体が制作した、曖昧な情報で「危険な人狼」像を提示するポスター

6.3 2030年代の後期のポスターの解説

この時期になると、人狼に対する露骨な差別は少なくなるものの、人狼に対する偏見は社会に広く残ったままであるという設定である。差別や排除が、故意に差別しようとする人のみによるものだけではなく、悪意の無い人によっても行われることがあるということ表現している。

6.3.1 人狼をテーマにした洋画のポスターと、その映画を恋愛映画として宣伝する日本版のポスターの解説

社会的に弱い立場にある人は、パッシングを行い社会生活を過ごしていることも多い。

石丸はマイノリティとしてLGBTについて論じながら、パッシングについて「しかし見えないマイノリティの場合には、いろいろな選択ができます。「私はマイノリティです」とカミングアウトして周囲に知らせることもできます。一方、見た目で見えないので多数派のフリをして生活することもできます。このやり方は、多数派として

通用する（パスする）という意味でパッシングと呼ばれます。見えないマイノリティである人たちが見えるマイノリティと大きく違うのは、人間関係の中でカミングアウトするかパッシングでいくかという判断を常にしながら生活することです。」と述べている。社会的マイノリティは、自身の属性を隠して、マジョリティの振りを生活することで、差別や偏見といった問題をやり過ごしている。

筆者は、パッシングは社会的マイノリティ当事者だけが行う行為ではないと考えている。社会的マイノリティの身内、所属する団体、管理権を委ねている人物によって、不利益を被ると判断された場合には、パッシングを強要されることもあると考える。芸能事務所が、人気に与える影響を懸念して、アイドルに社会的マイノリティとしての出自を公表させないなどである。

そのような、他者から属性を隠そうとされる問題について、図8と図9のポスターでは表現した。

図8は、「Passing(or Job Interview with the Werewolf)」という人狼が主人公のブラックコメディ映画のポスターという設定で、図9はその映画の日本版のポスターである。国際的に公開されている映画だと、国ごとにマーケティングの仕方が違う。配給会社の裁量によっては、ビジネス的に相応しくないと判断された要素が隠されることもある。特に海外映画の日本版ポスターは、文字情報が多くなったり、シンプルなデザインだったものを出演俳優主体のデザインにするなどの改変がされるケースが多い。

図8と図9のポスターは、その日本の映画興行に関する文化を参考にデザインした。

図8ではタイトルにWerewolf（＝人狼）の文字が入っているが、日本版の図9のポスターでは「ムーン・ラブ」と改題されて人狼の要素が消されている。またビジュアル面においても、図8のオリジナル版のポスターには人狼であることを示唆する耳がデザインされているのに対して、日本版の図9のポスターでは、その耳は消え、さらに恋愛映画としての宣伝文句が追加されている。

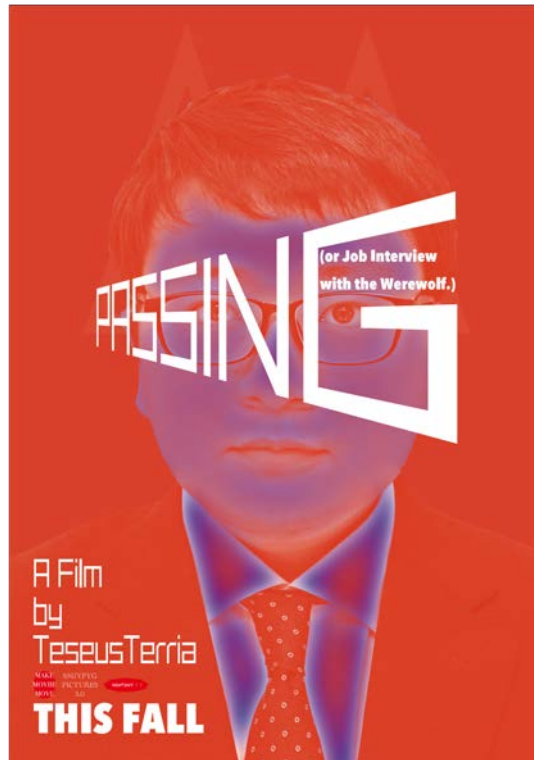


図 8 人狼をテーマにした架空の映画「Passing(or Job Interview with the Werewolf)」のポスター



図9 「Passing(or Job Interview with the Werewolf)」の日本版ポスター

6.3.2 人狼の身体的特徴に関する偏見をメイクとして商品化した雑誌のポスターの解説

ブラックフェイスのように、ある属性の身体的特徴に関するステレオタイプを、誇張して真似ることは差別に該当する。また、「ブラックフィッシング」や「文化の盗用」のように、ある属性の身体的もしくは文化的要素を、他の属性の人が取り入れて、利益にすることも差別である。

日本の美容業界においては、「ハーフメイク」「韓国っぽメイク」という言葉に代表されるように、人種や属性の身体的特徴に美的価値を見出し、それを商品化する傾向がある。

また、日本における「ハーフメイク」が架空の白人の身体的特徴を再現しているメイクを指しており、他人種の混血について無視している問題があるとも考えた。

筆者は、メイク業界においても、ある属性に対するステレオタイプに関して偏見を助長している側面があると考えた。



図10 ジンロウっぽメイクを特集するメイク雑誌の広告ポスター

その問題点を表現するために、「ジンロウっぽメイク」を特集する架空の雑誌「HALF UP」のポスターである図 10 を制作した。ある属性が美しいものとして商品化されることの問題点を、人狼がジンロウとして商品化されることに例えて表現した。

6.3.3 人狼は暴力的という偏見によって制作された暴漢注意のポスターの解説

ステレオタイプによって、ある属性に対して特定の役割を担わせることがある。第 5 章でも述べた通り「女性は車を運転するのが下手」や、「男性は育児には向いていない」といったステレオタイプを発信することは、人々に間違った認識をもたらし有害である。

図 11 のポスターは、ポッププレイバック公園という架空の公園に設置された、暴漢注意のポスターという設定である。暴漢のイメージとしてデフォルメされた人狼で描かれている。暴漢というイメージとして人狼を結びつけた、この看板の製作者には、人狼に対する根強い偏見があると推測できる。また、公園の利用者、特に子供は人狼に対してネガティブな印象を受け取る可能性がある。図 11 のポスターは偏見の悪循環を表現している。



図 11 架空の公園の管理局が敷地内に設置した、暴漢のイメージをデフォルメされた人狼が用いられているポスター

6.4 2040年代のポスターの解説

2040年代に入ると、人狼に関する人権意識が高まり、社会にも変化が起きる。差別や偏見を広めることもあるポスターであるが、社会に起こる良い変化を知らせるのもポスターであるという希望を示したいと考えた。

6.4.1 チョコレートの無いバレンタインイベントのポスターの解説

宗教上の理由、個人的信条、そしてアレルギーの問題で食べられるものに制限がある人がいる。それらの人は地域の食習慣と合わないと、生活にも不便が出てくる。その人たちを包括する社会を作るためには、特定の食材を用いないレシピの考案や、条件に合う食事を提供するレストランの情報共有が必要である。

例えば、中央大学（2017）は、ムスリムの留学生の増加したことを受けて、『中央大学多摩キャンパスでは、「中長期事業計画 Chuo Vision 2025」に基づくグローバル化の推進に伴い、多様な学生に対応できるよう、2016年4月より、ハラール認証カレーの販売を開始いたしました。さらに学生のニーズに応えられるよう、ハラール食品の取り扱いを拡大し、2017年4月10日（月）からは、日本ムスリム協会の認証を受けたカップラーメンやクラッカー、ビスケットの販売も行っています。どなたでも購入が可能です。』というというプレスリリースを行っており、大学の多様性獲得の姿勢が窺える。

本制作における人狼は、チョコレートと玉ねぎが食べられない。これはイヌ科の動物の特徴に由来する設定である。

そこで人狼を包括する社会を作ろうとする活動として、「チョコレートを食べないバレンタインのイベント」が主催されるのではないかと考えた。国民的なイベントであるバレンタインを、チョコレートが食べられない人狼も楽しめるようにするためである。

図 12 は、架空のデパート「OOAU SAPPORO」が開催したバレンタインイベントである「CACAOFREE VALENTINE FAIR」のポスターである。チョコレート以外のお菓子が販

売されるイベントという設定である。デザインもマカロン、カップケーキ、クッキー、ソフトクリームと言ったチョコ以外のスイーツで構成されている。

人狼の身体的な問題点を踏まえつつ、社会で人狼と共生しようとする動きがあることをこのポスターでは表現した。

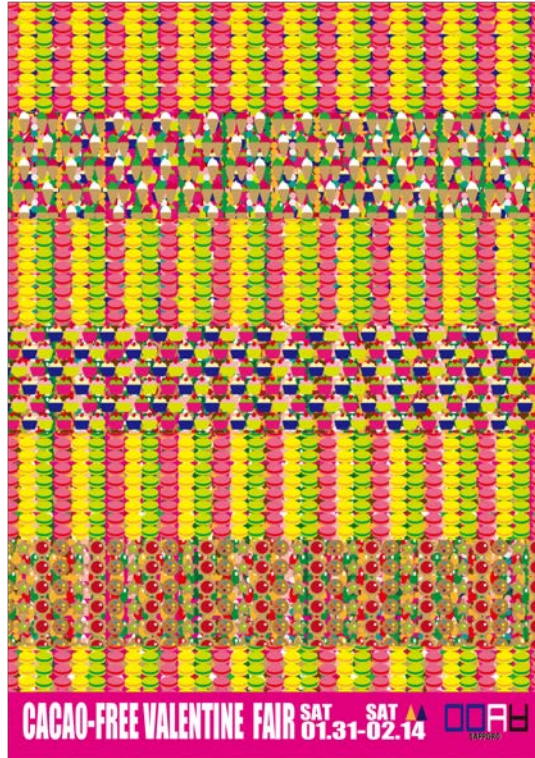


図 12 架空のデパートが宣伝用に制作した、カカオフリーのバレンタインイベントのポスター

ター

6.4.2 人狼の政党の選挙ポスターの解説

社会的マイノリティに優しい社会を作るにあたっては、当人を代表する政治家が必須である。社会的マイノリティは、人数に関わらず、意見が社会に通りにくいからだ。

そこで、図 13 の人狼による架空の政党である「狼民党」のポスターを制作した。既存のポスターにありがちな、大物政治家が意気込みや、党の素晴らしさを語るポスターではなく、「デートの待ち合わせは投票所」というコピーと共に、カジュアルに選挙に参加することを呼びかけるデザインにした。

これは狼民党の革新的で、柔軟である政党としての性質を表現したものである。



図 13 選挙に参加することを呼びかける狼民党のポスター

6.4.3 人狼を讃えるパレードのポスターの解説

社会的マイノリティにとって自身の存在を社会にはっきりと主張し、自身のアイデンティティを讃える場が重要である。

例えば、LGBT コミュニティは、レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダーの文化を讃えて、社会運動の場にもなっているプライド・パレードというイベントが世界各地で行なっている。

この年代の人狼も、自身達を讃えるイベントを行うと想定し、主催を広報するポスターを制作した。本制作における他のポスターとは違い、このポスターは手づくりのものである。人狼が個人として自身の存在を、社会にアピールできるようになってきていることを表現した。



図14 人狼を讃えるパレードの主催を告知するポスター

6.4.4 2040年代のポスターに登場するマークについての解説

2040年代の全てのポスターには、図14のマークが登場する。



図15 人狼の権利活動の連携を示す架空のマーク「イアートライアングル」

これは、イアートライアングルというもので、人狼の権利活動の連携を示す架空のマークである。左の青が「人間としての知性」、右の黄色が「人間としての親切さ」を象徴し、二つの三角形は狼の耳を表しており、「人狼は人間だ」というメッセージが込められている設定である。

現実社会においても LGBTQ コミュニティが、当事者や支援者との連携を表すのに、レインボーフラグやピンクトライアングルといったマークを使用していることを参考にした。

第7章 架空のポスター展「Moonlit Posters」についての解説

第6章で述べたとおり、制作したポスターにはそれぞれ複雑なバックグラウンドがあり、ポスター単体を鑑賞するのでは限界がある。制作したポスターを使って、ポスター展を制作することにした。

架空のポスター展を制作の詳細については、以下の項目で述べる。

7.1 架空のポスター展「Moonlit Posters -人狼の排除と包摂にまつわるポスター展-」の設定

本制作で制作する架空のポスター展のタイトルを「Moonlit Posters-人狼の排除と包摂にまつわるポスター展-」にすることにした。

開催時期は2045年という設定で、「メディアにおける人狼の排除と包摂の表現」をテーマにしたポスター展である。第6章で制作したポスターを、過去のポスターアートとして振り返る趣旨の展覧会である。

7.1.1 小型ギャラリースペースの設営



図1

図16 設営した展示スペース

約910mm×約1820mmのベニヤ4枚分で構成された図16の展示スペースを設営した。

7.2 複数のポスターや資料を時系列順に並べる展示方法

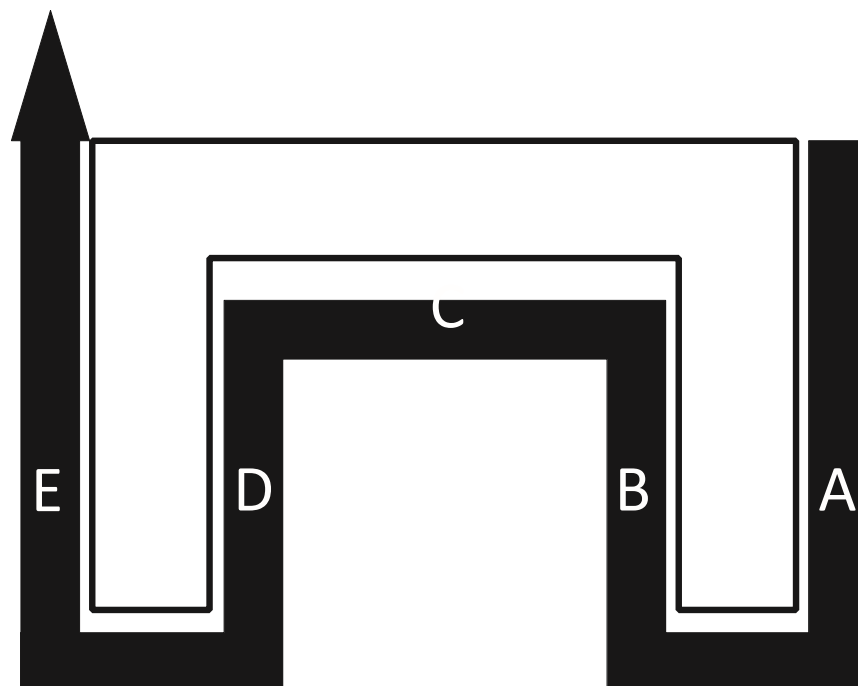


図 17 鑑賞の順

鑑賞は図 2 の順で行う。A には架空のポスター展としての導入の役割を担う、図 18 のメインビジュアルやギャラリーの挨拶文が展示されている。



図 18 架空のポスター展「Moonlit Posters-人狼の排除と包摂にまつわるポスター展

」のメインビジュアル B→C→D の順に、図 19 のように第 6 章で述べたポスターの制作時期の時系列に沿って制作したポスター展示する。



図 19 架空の時系列順に展示したポスター

最後の E では、卒業制作としての解説資料を展示する。

この時系列順で並べることで、時期ごとに違うポスターでの人狼の扱われ方の変遷を辿ることができる。第 6 章で述べたとおり、「2030 年代初期」、「2030 年代後期」、「2030 年代後期」、「2040 年代」とで社会の人狼の立ち位置が変化するため、時系列に沿った展示で、鑑賞者はその変化を理解しやすくなると思った。

7.3 キャプションによる作品解説

本制作におけるキャプションはポスターのタイトル、設定状のポスターの制作時期、設定上の製作者、簡単な作品概要と制作背景を記載する。ポスターのデザインからだけでは把握できない情報を、例えば図 19 のキャプションのように補足する。



『みんなで STOP！左利き』

**制作者 標準人間教行及び
適切な保健教育を考える会**

制作年 2031 年

**このポスターは、一部の小学校教師が
学校に持ち込んだものである。**

**当時、左利きの小学生に対して、
「家出症が感染するから学校に来るな」
とハラスメントを行った事例もある。**

図 20 図 1 のポスターのキャプション。制作年、制作者、作品の概要と制作背景を記している。

7.4 補足資料の架空の新聞記事

展覧会の補足資料として、図の 21 架空の新聞の切り抜きを制作、展示をすることにした。

補足資料では、ポスターの社会的文脈を提示する必要があると考えている。ここでの社会的文脈は「ポスターがどのような社会背景で制作されたか」、「ポスターを社会はどのように受け止めたのか」を指す。

新聞は、特定の時代に起きた出来事や、それに対する言論を取り上げるメディアである。このため、架空の未来で発行された新聞の記事の切り抜きを展示することで、

ポスターが制作された時期には、どのような出来事があったのかや、どのような考え方があったのかを示すことができ、ポスターの社会的背景を提示することができると思った。

新聞の記事の内容は、第5章の5.5の項目で述べた、架空の未来の日本での社会を反映した内容である。

また、これに加えて図22のよう架空の新聞社、発行年日、記事の概要」を記載した新聞のキャプションを制作の展示に加えた。

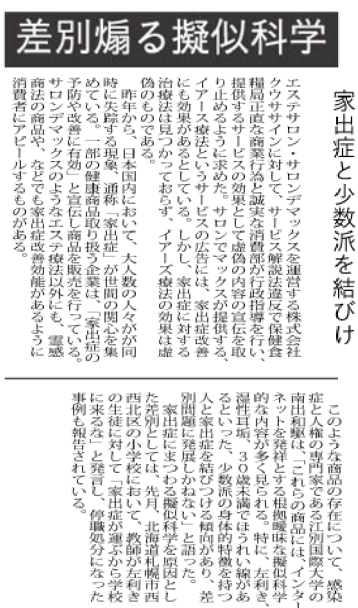


図21 補足資料の新聞の切り抜きの一例。2030年代初期の家出症が原因の社会問題を解説している。

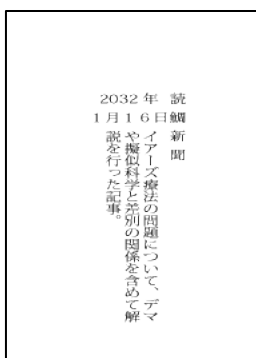


図22 図21の新聞のキャプション

7.5 新聞記事内におけるポスター以外のメディアにおける人狼の扱われ方への言及

本制作では 2030 年代以降の日本を作品の舞台に設定したが、その社会ではポスター以外の、インターネットや動画やなどの様々なメディアが存在し、そのメディアにおいても人狼が取り上げられていることが現実的である。制作のメインをポスターにしたが、その社会に存在している他のメディアにおける言及が必要であると考えた。

そのため本制作では、補足資料である新聞の記事の中でポスター以外の SNS や映画といったメディアにおける人狼に対する排除について述べる内容を記載した。

例えば、図 11 のポスターに対する補足資料である図 22 の新聞の切り抜きでは、ポスターの問題点について SNS で議論が交わされていることについて述べてある。

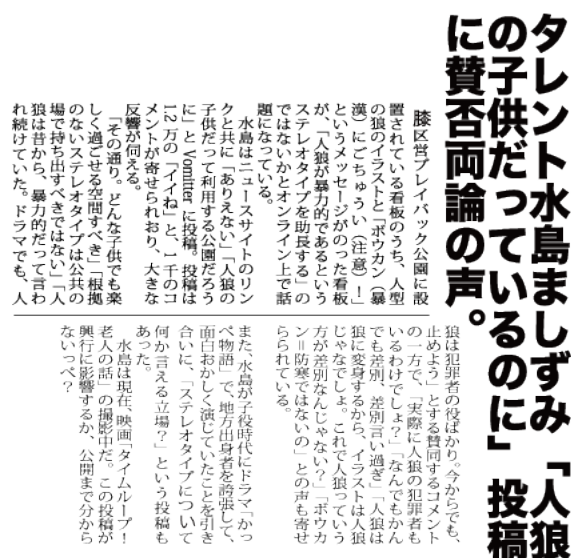


図 23 人狼のステレオタイプに関して SNS での議論になったことを報じている新聞記事

第8章 制作の振り返りと結論

これまで、本制作に関する目的、調査、試行、実際の制作物に関する内容について述べてきた。本章では、制作の目標である「鑑賞者が現代社会の社会的マイノリティに関する問題について考えられる作品の制作」、「制作の題材として、多くの人が存在を認知している一方で、実際には存在しないため、現代人に直接的な利害関係の無いファンタジーの架空的な存在を用いることで、現代社会を表現する手法の可能性を検討」の2点に軸をおいて作品を振り返る。

8.1 「鑑賞者が現代社会の社会的マイノリティに関する問題について考えられる作品の制作」についての試行と振り返り

制作を通じて、現実の日本の社会における社会的マイノリティの排除と包摂の事例を参考に、日本における幅広い差別や反差別の諸相の表現を試みた。

レイシストやヘイトスピーチのような露骨な差別の表現についても取り扱う一方で、映画やメイク雑誌のポスターのように、一見すると差別的には見えないポスターの制作も行った。誰かを差別する意識がないと感じている鑑賞者に対して、「悪意が無くても差別は起きる」ということを表現するためである。

また、社会的マイノリティに包括に関するポスターも制作したが、これによって、社会的マイノリティに対してのポジティブなアクションの例を示した。社会的マイノリティについて考えるにあたって、その不利益についてだけ着目するのではなく、どうすれば不平等がなくなるかについても鑑賞者に考えさせる必要があると考えたからだ。

このようにデマ、ステレオタイプ、パッシング、社会的障壁など、作品全体を通じて社会的マイノリティに関する問題提起をするポスターが制作することができると思われる。

一方で、8.3の項で具体的に述べるが、展示方法に関して、卒業研究公開審査会におけるフィードバックを通じて、ポスターそのものの文脈を鑑賞者に適切に伝達するための改善の余地があることが認められた。また、具体的には8.3.2の項で述べるが、本制作で設定した2030年代-2040年代という約10年という期間が、社会的マイ

ノリティに関する問題を表現する年数としては短い可能性も公開審査会に参加した教員によって指摘があった。

8.2 「制作の題材として、多くの人が存在を認知している一方で、実際には存在しないため、現代人に直接的な利害関係の無いファンタジーの架空的存在を用いることで、現代社会を表現する手法の可能性を検討」についての試行と振り返り

ポスター展の制作を通じて、架空の存在を用いて、現実社会の問題を表現するのは有効な手法だと考えた。架空の社会的マイノリティ（＝人狼）が体験する差別問題について、「もし、人狼がいたら、こんな差別が生まれるかもしれない」という世界を提示することで、現実社会における差別を直接取り上げるより、特定の事件や個人に対する批評だけではなく、差別や排除といった現象そのものを表現するのに注力することができると感じた。つまり、特定の事例について直接的に表現するのではなく、人間が傾向として起こしがちな、普遍的な問題を表現するにあたっては架空の存在を用いるのであれば、有効であるということだ。

一方で、ファンタジーの架空的存在として人狼を用いることに試みたが、架空の存在を用いるには注意が必要であると考えた。

特に、架空の存在を制作に用いる場合には、その特徴をはっきりと設定することが必要だ。架空であるが故に、その存在に対する鑑賞者の知識やイメージがバラバラであるため、鑑賞の際には統一させる必要がある。本制作ではあらかじめ、その設定をはっきりとさせて、それを補足資料である新聞で明記した。

また、架空の存在ではあるものの、信仰の対象になっていたり、地域のシンボルになっていたりする存在を用いるのにも注意する必要があると考えた。明確な意思があって、そのような存在を用いるのにはいいが、アイデンティティと結びついた存在を、敬意を持たずに利用するのは、それ自体が差別になるからだ。

8.3 卒業研究公開審査会を通じての振り返り

2022年12月16日に実施された卒業研究公開審査会を通じて、作品に対するフィードバックを受けた。

公開審査にあたっては、まず本制作のコンセプトの紹介を行い、その次に、架空の展示会の学芸員として本論文の第5章と第6章で述べた作品の設定について口頭で解説し、最後に作品の制作手法について述べた。

この審査を通じて公開審査に参加した札幌市立大学の教員から、作品の改善点や問題点についての口頭でのフィードバックを受け取ることができた。

教員や生徒が作品に対する良い評価は、口頭でのポスターや人狼の解説を受けた上で、「設定が面白い」という意見であった。

一方で、公開審査会において指摘された、本制作の主要な問題点は「ポスターとキャプション、新聞の展示のみでは、鑑賞者が人狼に対する差別の文脈を十分に理解することができない可能性がある」、「差別や偏見という問題を描く上では10年という年数の設定では不十分ではないか」の2つであった。

8.3.1 ポスターとキャプション、新聞の展示のみでは、鑑賞者が人狼に対する差別の文脈を十分に理解することができない可能性がある点と、考えられる改善案

公開審査会にあたっては、第5章や第6章の内容を口頭で解説したが、展示を見ただけでは、その内容を十分に把握することができないのではないかという指摘を複数の教員からもらった。

また、複数の学生からも、口頭での解説を聞いてから作品の全体像や意図を把握することができたという意見があがった。

これらの意見は、本制作が、現代社会の社会的マイノリティについて鑑賞者に考えられる制作を行うという目標達成に向けて、改善の余地があることを示している。

改善の案としては、新聞記事に対するキャプションを加える、口頭発表の内容を音声データ化して配信するといった方法が考えられる。

8.3.2 差別や偏見という問題を描く期間が10年という年数が十分でない可能性がある点と、考えられる改善案

本制作における人狼の差別と包摂に関する歴史を表現するにあたって、約10年という期間における人狼の変遷を表現したことについて、「特定の属性に対する差別の問題が、10年程度で収束する印象を与えるのではないか」という教員の意見があっ

た。また、これに関連して「差別と包摂に関するムーブメントが順番に起きるのではなくて、同時多発的に起きるのが現実的ではないかと」という意見もあった。

社会的マイノリティが直面する、差別や偏見といった問題を現実的に表現するにあたって、これらの意見を踏まえて「人狼に対する排除と包摂が繰り返された長い歴史の一部」と本制作の設定を改善することで改善ができると考えた。

8.4 振り返りのまとめ

本制作は、社会的マイノリティの諸相を、様々な視点で表現を行い、問題提起を行った。

本制作は、現実社会における社会的マイノリティの人権問題を参照し、人狼の排除と包摂に関するストーリーを創造し、それを現実社会におけるポスターにおける表現を誇張したオリジナルポスターによって表現した。

この制作手法によって、作品の完全なフィクションというわけでもない絶妙な現実感を演出することにつながり、公開審査に参加した教員や学生による「設定が面白い」という評価に繋がったと考察する。

このことからポスターそのものは、「架空の社会への没入感を創出すること」に成功したと考える。この点においては、「制作の題材として、多くの人が存在を認知している一方で、実際には存在しないため、現代人に直接的な利害関係の無いファンタジーの架空的な存在を用いることで、現代社会を表現する手法の可能性を検討」と「制作の題材として、多くの人が存在を認知している一方で、実際には存在しないため、現代人に直接的な利害関係の無いファンタジーの架空的な存在を用いることで、現代社会を表現する手法」が有効であるという検討できたと考える。

一方で、本制作における問題点について公開審査による教員のフィードバックを通して、「ポスターとキャプション、新聞の展示のみでは、鑑賞者が人狼に対する差別の文脈を十分に理解することができない可能性がある」とことと、「差別や偏見という問題を描く期間として、10年という年数の設定が適切でない可能性がある」があることが明らかになった。これらの点が、「鑑賞者が現代社会の社会的マイノリティに関する問題について考えられる作品の制作」を目指す上で改善するべきであることがわかった。

その改善案として、それぞれに「新聞へのキャプションの追加や、口頭での解説の音声ファイルの配布」、「表現する年数を、人狼に対する排除と包摂が繰り返された長い歴史の一部という設定に置き換える」が有効であると考えた。

第9章 おわりに

9.1 あとがき

卒業研究開始当初、ゼミで研究のテーマを決めるのに難航した私は、大好きな『ハリー・ポッター』にインスピレーションを求めた。

研究資料を探る中で、好きなキャラクターであるリーマス・ルーピンが、病気や障害のメタファーであることを知った筆者は、同様に架空の存在を用いて、現実社会における差別を表現したいと考えた。

制作は、『ハリー・ポッター』における「被差別の対象を架空の存在に置き換える」手法をデザイン作品に置き換える試みから始まった。そして検証の末に、その手法を応用し、架空のポスター展を制作するに至った。

制作目標は、鑑賞者が日本の社会的マイノリティの差別に関心を持つ機会を作ることと、架空の存在で現実社会の社会問題を表現する方法の模索である。

被差別の対象を人狼に設定し、ポスターや、補足資料の新聞記事によって構成されるポスター展で、架空の未来の日本における人狼の排除と包摂の経過を表現することにした。

制作の過程において、日本の社会的マイノリティを取り巻く状況について知るに連れて、多くの人に社会的マイノリティについて考える場を作ることの重要性を痛感した。本制作も、鑑賞者が社会的マイノリティの排除について考え、包括的な社会を思いうきかけになることを願う。

9.2 謝辞

本制作にあたり、指導していただいた須之内元洋先生、また本制作に挑戦するにあたっての知見をいただいた他の先生、ゼミ仲間に深い感謝を申し上げます。

参考文献

- ・伊達桃子、2009、「ファンタジーの新しい波-『ハリー・ポッター』は何を持したのか-」、社会科学雑誌創刊号、pp. 149-170
- ・太田耕軌、2006、「『ハリー・ポッター』に見る偏見と差別」、天理大学人権問題研究室紀要 第9号、pp. 123-131
- ・二羽 泰子、2019、「社会的マイノリティとは何か」、UTokyo TV-東大 TV、

<https://today.tv/contents-list/2019FY/mini-lecture12/12-1>、最終アクセス 2022 年 12 月 9 日

・Richard T. Schaefer、2011、「What is a Minority Group?」、Race, Racism and The Law、

https://www.racism.org/index.php?option=com_content&view=article&id=280:minor0101&catid=15&Itemid=118、最終アクセス 2022 年 12 月 9 日

・国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 地域精神保健・法制度研究部、2021、「スティグマについて」、

<https://www.ncnp.go.jp/nimh/chiiki/about/stigma.html#1>、最終アクセス 2022 年 12 月 9 日

・坂田薫子、2014、「ハリー・ポッターのイギリス (1) — 『ハリー・ポッター』と現代イギリス社会における人種問題」、日本女子大学英米文学研究 49、pp. 125-142

・坂田薫子、2015、「ハリー・ポッターのイギリス (2) — 『ハリー・ポッター』と現代イギリス社会における階級問題と政治」、日本女子大学英米文学研究 50、pp. 71-89

・J.K. ローリング、2016、「エッセイ集 Hogwarts 勇気と苦難と危険な道楽」、Pottermore Publishing、第 2 章 リーマス・ルーピン

・Roslyn Weaver、2010、「Werewolf as Disability and Illness in ‘Harry Potter’ and ‘Jatta’ Papers: Explorations into Children’s Literature, Vol. 20, No2, pp. 69-82

・公益財団法人日本 ケアフィット 共有機構「障害の社会モデル (共生社会と心のバリアフリー)」 https://www.carefit.org/social_model/、最終アクセス 2022 年 12 月 9 日

・J.K. ローリング、松岡佑子訳、2000、「ハリー・ポッターと秘密の部屋」、静山社

・J.K. ローリング、松岡佑子訳、2008、「ハリー・ポッターと死の秘宝」(上下)、静山社

・土田泰子、2005、「プロパガンダ・ポスターとイラストレーション：グラフィックデザインにおけるプロパガンダの手法と効果」、現代社会文化研 34、pp. 1-18

・アラン・ヴェイユ、竹内次男訳、1994、「ポスターの歴史」、白水社

・内野 正幸、清水 英夫、1991、「差別的表現とマス・メディア」、新文学評論 40 巻、pp. 324-325

- ・ 法務省、「ヘイトスピーチ許さない」、
https://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken04_00108.html、最終アクセス 2022 年 12 月 9 日
- ・ 福島県男女共生課、2014、『平成 21 年度版福島県男女共同参画高校生副読本からステレオタイプで決めつけていない?』のページです』、
<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/16005c/danjo-beyourself21.html>、最終アクセス 2022 年 12 月 9 日
- ・ 手塚和佳奈、佐藤和紀、大久保紀一朗、久保田善彦、堀田龍也、谷塚光典、2021、「メディアや情報に対して大学生がもつステレオタイプやバイアスに関する実態調査の試み」、日本教育工学会研究報告集第 3 号、pp, 9-16
- ・ BBC NEWS JAPAN、2019、『「有害な」男女のステレオタイプ描く広告、イギリスで禁止』、<https://www.bbc.com/japanese/48659092>、最終アクセス 2022 年 12 月 9 日
- ・ 坂田薫子、2015、「ハリー・ポッターのイギリス (3) — 『ハリー・ポッター』と現代イギリス社会のジェンダー観」、日本女子大学英米文学研究 65、pp. 71-89
- ・ 公益社団法人日本心理学会、「新型コロナウイルス (COVID-19) に関わる偏見や差別に立ち向かう (Combating bias and stigma related to COVID-19)」、
https://psych.or.jp/special/covid19/combating_bias_and_stigma/、最終アクセス 2022 年 12 月 9 日
- ・ AMERICAN PSYCHOLOGICAL ASSOCIATION、2020、「Combating bias and stigma related to COVID-19」、<https://www.apa.org/topics/covid-19/bias>、最終アクセス 2022 年 12 月 12 日
- ・ 五島真理為、「HIV 感染者の人権—わたしたち自身の問題として—」、
<https://www.pref.mie.lg.jp/DOKYOC/HP/20444021126.htm>、三重県ホームページ、最終アクセス 2022 年 12 月 9 日
- ・ 田南立也、2020、「恐れるべきはウイルスで人ではない。社会をむしばむ「コロナ差別」をなくすためには」、<https://www.nippon-foundation.or.jp/journal/2020/45019>、日本財団ジャーナル、最終アクセス 2022 年 12 月 9 日
- ・ 札幌市、2022、「災害時要援護者支援対策」、
https://www.city.sapporo.jp/kikikanri/torikumi/saigai_engosya/youengosha_index.html、最終アクセス 2022 年 12 月 9 日
- ・ 杉田水脈、2018、新潮 45 2018 年 8 月号、『「LGBT」支援の度が過ぎる』、新潮社
- ・ 脇阪紀行、2014、「ヘイトスピーチにどう立ち向かうのか：在特会から考える未来共生」

・石丸 径 一 郎、「LGBT と カ ミ ン グ ア ウ ト」、
<https://psych.or.jp/publication/world078/pw09/>、公益社団法人日本心理学会、
最終アクセス 2022 年 12 月 9 日

・中央大学、2017、「中央大学多摩キャンパスでのハラール食品の取り扱いを拡大」、
<https://www.chuo-u.ac.jp/aboutus/communication/press/2017/04/678/?r=1>、最終
アクセス 2022 年 12 月 10 日